
少年銀河

白和希弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年銀河

【Nコード】

N1344U

【作者名】

白和希弥

【あらすじ】

かつて親友でいじめっ子だったやつと、かつて存在を消されていた少年のお話。

0話 孤立

信じていた。

ああ、信じていたさ。

でも君はどうだった？

人に追い詰められていた俺をみていて楽しかった？

泣きながら君を見ていた俺は滑稽だった？

人の視線に怯えている俺を見て愉快だった？

あの日交わした約束

『守る』

と強く言ってくれた目

そんな目はいつしか

歪んで

沈んで

狂って

俺に周りのやつらと

同じような目で見えてきた

自分は落胆した

所詮みんな同じなんだと

俺自身をみてくれていたと思っていたのに

捨てられた俺に残ったのは
孤独だった

復讐だなんて、考えなかった
ただ、死んでもいいとは思った
でも弱い俺にはそんな勇氣はなくて
死なずに、生きている

ただ、この世界から孤立しながら

1話 平穩

太陽と月がくつつついていて

風とは逆の方向に草がなびいている

ここは人間しかいない

自分はどこにいる？

わからない

でもこの世界を見渡していた

人間が人間の上に座っている

おかしいようなおかしくないような

月と太陽には顔があつて、そんな下にいる人間を見て

太陽は泣いていて、月は笑っている

くつついているのに、違っている

それはまるで人間の心のように滑稽だった

強い者は弱い者に対して笑い、弱い者は強い者に対して泣く

ああ、この世界は混沌としている

そんな事を思つた瞬間に目が覚めた。

また変な夢を見たものだ。

でもこの世界もこんな感じで回つて時を進めているんだろうなとぼんやりはつきりしない頭で思った。

そんな世界で自分は生きているだと考えたら吐き気がした。

ピンポン

「きたか。」

毎日繰り返しならされるチャイムにはもう慣れた。

”同じ”

それがいかに退屈で大切かを僕は知っている。

何かの障害や歓喜は一時的な波で、いずれかはおさまってしまう。

だったらそんな身を滅ぼすような変異ある人生より、いつも同じの人生をおくりたくなる。

それにもう、僕は疲れたんだ。

人に視線をむけられるのは、嫌だ。

いろんな感情が一気に感じるから、僕は人の目が嫌だし興味が失せた。

「おはよう、禄。」

「はよ、狼。」

にひって笑うコイツは番犬。

まさに周りからはそんなイメージがあるはずだろう。

毎日毎時間となりにいるコイツは何がいいのかわからないが俺のことを崇拜している。

「今日のお弁当自信あるんだーっ。」

「…あーそ。」

「禄が大好きな卵焼きも上手にできたんだー。」

「そか。」

反応が薄くて、普通は首をかしげるか怒る人が今までが多かったのに、コイツは少々頭がおかしいようで笑顔でさらに喋りだす。

僕が5文字以上の言葉を発すると嬉しそうに尻尾振り、こちらをキラした目でこちらを見ってくる。

…別にその先はなにもないのに。
ただ言おう。

僕だって喋るさ、失礼な奴だなあ。

「あれ、狼…。」

「んー？なにになに？」

今日は中間テストの順位が貼り出される日。

1位は僕。

まあこれは当たり前だ。僕が1位以外ありえない。

だって毎回満点なんだから。

ただいつもと違う点がいくつか。

まず、狼が2位にいない。

そして見覚えのある名前が2位は貼り出されている。

最後に、そいつは絶対ここにいるはずのない人物だということ。

… ああ、名前を見ただけで嫌気がさす。
段々自分の眉間に皺が寄っているのがわかり、あいつのことで自分が乱されるのがすごく嫌だ。

なんで、あるのかな…

” 今岡紫規 ”

死ねばいいのに。
名前を睨みながら強く思った。

「見たことないな…」。
「…」。

字を睨んでいたらばそつと狼が呟いた。
狼は暗記が得意で高等部にいる生徒、教師は全員言えるだろう。

その狼が知らないというのだからあいつは転校生ということだ。

…何故？

「…まさか、家…？」

「禄？」

「っ、なんだ？」

「いや、なにもだけど…。」

禄、震えてるよ。

狼に言われて初めて気づいた。

普段は低いといっても感じ取れる体温が今はなく、手は真っ白だった。

完全に何かに染められている自分。

声も遠くなっていて、世界に1人になった気分だ。

「禄っ！！」

「っ！」

「…大丈夫だから、ね？」

「ろ、う…っ。」

自分とは違う体温。

それがいかにか心地よいかわかった気がする。

でもそんな気分はすぐに吹っ飛んでしまった。

「碧禄。」

「っ！」

「…禄？」

「…知らない、あいつ。」

だから早く行こう、狼。」

「碧禄、」

やめろ、名前を呼ぶな。

僕が手に入れた平穏な日常が壊れていく。

…苛々する。

ああ、こんなに誰かに感情的になるのは久しぶりだ。

「…ねえ、禄。」

「…っ、」

「もう大丈夫だから、1回とまろう?」

「…っ、」

「…耳、出てきている。」

「…狼…っ。」

「大丈夫、もう俺しかいないから。」

ほらタオルあげるー。

狼の笑顔に癒されている自分が情けなく思えた。

1人で生きていくなんてよく言えたものだよな、本当に。

あいつの姿見ただけでこの有様なのに、これからどうやって1人で生きていくんだよ。

「禄、だーめ。」

今ちょっとだけ変化しているから手血でちゃう。」

4割変化してしまっている体は耳は生えてくるわ、犬歯はのびてくるわで狐というのがまるわかり。

尻尾がスラックスの中で動いてとても邪魔だ。

あまり変化するとまたスラックスを買わないといけないから抑えな
いと…。

「カラコン溶けた…?」

「うん、バッチシ。」

「…あいつ高いのに…。」

「大丈夫、あげるからっ!」

「お前のやつへんなやつが多いから嫌だ。」

「えー赤いぐはあっ!」

狼は僕の目を気味悪がらない。
どこが いい のやら、この不気味な瞳。

「大丈夫、禄の目はキレイだよ。」

… 変な奴。

2話 出会い

「…禄？」

「なんだ？」

「顔色悪いよ？」

「…大丈夫。」

「んもー…っ！」

「っ、」

ことん、

頭が勝手に横に倒れていった。

隣を見れば真剣な顔つきな狼がいて、

「ダメ、寝て？」

もう授業始まっているから諦めて寝な？

時間になったら起こすしさ？」

「…わかった。」

狼は頑固だから1回こう言ったら譲ろうとはしない。

だからこれは諦めて寝るしかない。

結局自分は狼に弱いのだ。

…いつからだろ、こんなに狼が近くにいるようになったのって。

確か入学してすぐ話しかけられたんだっけ。

ずつつきまとわれていた時僕が階段から落ちたのがきっかけだっ

たや、そういえば。

今みたいに怪我の治療のために妖怪の力が出てきてしまっって、それを見られたんだ。

そうしたらいきなり目の前に犬神がいて……ってだんだん意識がなくな……

「ごめんね、禄……」

俺、知ってるんだ……」

「ねえ、知ってる？」

「知っているわよ、あの子の事でしょ？」

「そうそう。」

碧の狐様とか崇められている碧禄。」

「まったく、不吉極まりないのに。」

「佐々もどうするのかしらね……。」

『ねえ、しい。』

『はい。』

『僕は知らない子なの?』

『そんなことないですよ、碧禄様。』

『しい、離れないで、ずっとずっと僕と一緒にいて...?』

『ふふっ、わかりました碧禄様。』

ああ、綺麗だなあ、しいは...

「く、禄っ!」

「...ん、」

「鐘鳴ったよー?」

「...そうか、...。」

「って寝るなーっ!」

...母様、今日も綺麗な蒼です。
そう、母様のような...。

「…なんだ、ここのクラスじゃないんだね。」

「らしいな。」

でも噂はすごいみたいだが。」

紫規の噂は学校全体にまわっていて、あの紅賀が負けた！とかなんとか。

ほんとに噂が大好きな奴らがたくさんいるものだ。

でも紫規自体には冷たい独特の空気が流れていて誰も近寄れず、遠巻きから黄色い声をあげるものばかりだった。

自分が紫規の周りにいる時だって、特に周りの大人に必要以上に媚びたりはせず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1344u/>

少年銀河

2011年10月8日13時59分発行